

社会の状況に対するメッセージや場所の持つ歴史性から引き出された表現

The expression that was drawn by a message for the social situation and the historicalness which lasted of the place.

キーワード：

社会
場所
歴史
気象
メッセージ

<抄録>

世界各国が保護主義化に傾く状況、緊迫化する東アジアとそれに対応して軍備を拡張する日本の現状、各地に被害をもたらしている異常気象、地域のアートイベントへの参加時にリサーチした伝統行事等、作品を制作する上でのキーワードとなった事象と作品との関係を紹介。

国境

大 き さ：約 h250 × w 900 × d500 cm

素 材：LED 蛍光灯、ic、養生テープ、竹、100v 電源等

発 表：夏池篤展（アートカゲヤマ画廊） 2017年10月20日～11月19日

極東アジアが熱い

大 き さ：約 h250 × w 250 × d 450 cm

素 材：LED 蛍光灯、ic、養生テープ、リチウムイオン電池等

発 表：夏池篤展（ボタニカ art space） 2018年10月20日～11月19日

北に向かう

大 き さ：約 h250 × w200 × d300cm

素 材：アルミ蒸着フィルム、針金、磁石

発 表：夏池篤展（ボタニカ art space） 2018年10月20日～11月19日

暑い人 寒い人

大 き さ：h170 × w100 × d 100cm、h 70 × w210 × d100cm

素 材：エアコン、冷媒管、温度計、プラスチックパイプ

発 表：夏池篤展（アートカゲヤマ画廊） 2019年10月21日～27日

続・川筋

大 き さ：（約 h200 × w250 × d 60cm 筏1隻）× 19 約 5000 cm

素 材：木、布、竹、ロープ

発 表：無人駅の芸術祭／大井川 2019年3月8日～24日

近年発表した作品の内容を大別すると、社会に対するメッセージの発信の手段である場合と、展示の場から受け取ったインスピレーションからなるものに分けられる。ギャラリーでの個展のようなニュートラルな空間での発表されたものは、現代社会が抱える問題に焦点を当て、その状況を告発するような形式であることが多い。一方で普段現代美術の作品が置かれることのない建造物や屋外の自然の中で展示する場合は、その場が持つ地理的な特性や歴史的背景からインスパイアされたものを表現の核とした作品を置いている。どちらも恒久的な作品ではなくインスタレーションやパフォーマンスの形をとり、鑑賞者の参加を促す要素を含んでいる。

ここでは2017年から2019年にかけて藤枝市のアートカゲヤマ画廊と静岡市のボタニカ art space で行った個展と、地域のアートイベントに参加して大井川河川敷で展開した野外展示作品について述べる。

「国境」（アートカゲヤマ画廊）

アートカゲヤマ画廊では「国境」をテーマとし、当時アメリカ合衆国トランプ大統領のメキシコとアメリカの間に壁を作るとの発言に対して反応したものである。その時の作品コメントは次のようなものである。（会場掲示メッセージ）

「国境の壁といえはかつての冷戦時代には東西ドイツの分断の悲劇を象徴するものであったが、今ではアメリカとメキシコとの境に作ろうと言ったトランプ大統領の発言を思い浮かべる人も多いかも。そのような壁は古今東西様々なところで作られてきた。その主な理由は民族・宗教・イデオロギー等の違いや経済格差などから生まれる周辺国への敵対意識であろう。ウェゲナーの大陸移動説によれば2億年ほど前には、今分かれているアメリカ、アフリカ、ユーラシ

アなどの大陸はほぼ一体化しており、それが徐々に移動して今の地形が形成されたということである。その後様々な経緯を経て多くの国家が成立していった。

会場には、かつて一塊だった頃の地形に現在の世界地図を配し、国境の形をテーピングした。そこにライセンサーが反応し枠内を動き回るロボットを置いた。そのロボット達は国境を守る警備兵であったり、国家権力によって外国への移動を禁じられた人々とも取ることができる。また境に沿って竹による柵を設置し、ロボットの発する光がそのシルエットを刻々と変化させる。それは侵略や内紛により今も変化し続ける国境の状態を示す。国境の意味をもう一度意識する装置としての作品である。>



「国境」会場風景

「極東アジアが熱い」（ボタニカ art space）

2018年のボタニカ art space では、北朝鮮の核開発、大陸間弾道ミサイルの発射により緊張するアジアの状況を受けて2点のインスタレーション作品「極東アジアが熱い」と「北に向かう」を発表した。その時のコメントを次に掲載する。
(会場掲示メッセージ)

《国境をテーマとした展覧会の第2弾となる。先回はアメリカとメキシコとの境に壁を作ろうと言ったトランプ大統領の発言を機に作品化を試みた。今回、緊迫度の増す極東アジアを対象に床と壁にその地図を配し、国境の形をテーピングした。かつては陸続きで民族の往来があったであろう地域が、抗争や内紛によ

り国境を隔てにらみ合う状態が続く。そこにラインセンサーが反応することで、国の枠内のみを動き回るロボットを置いた。そのロボット達は国境を守る警備兵であったり、国家権力によって外国への移動を禁じられた人々とも取ることができる。国境の意味をもう一度意識する装置としての作品である。≫

作品「国境」と「極東アジアが熱い」はそれぞれ世界と極東アジアを対象としたものだが、同一線上にある作品である。「国境」においてロボットは AC100v 仕様であったが、配線による絡みが多く生じたため、「極東アジアが熱い」は充電電池 DC14.4v 仕様に変更した。



「極東アジアが熱い」会場風景

「北に向かう」 (ボタニカ art space)

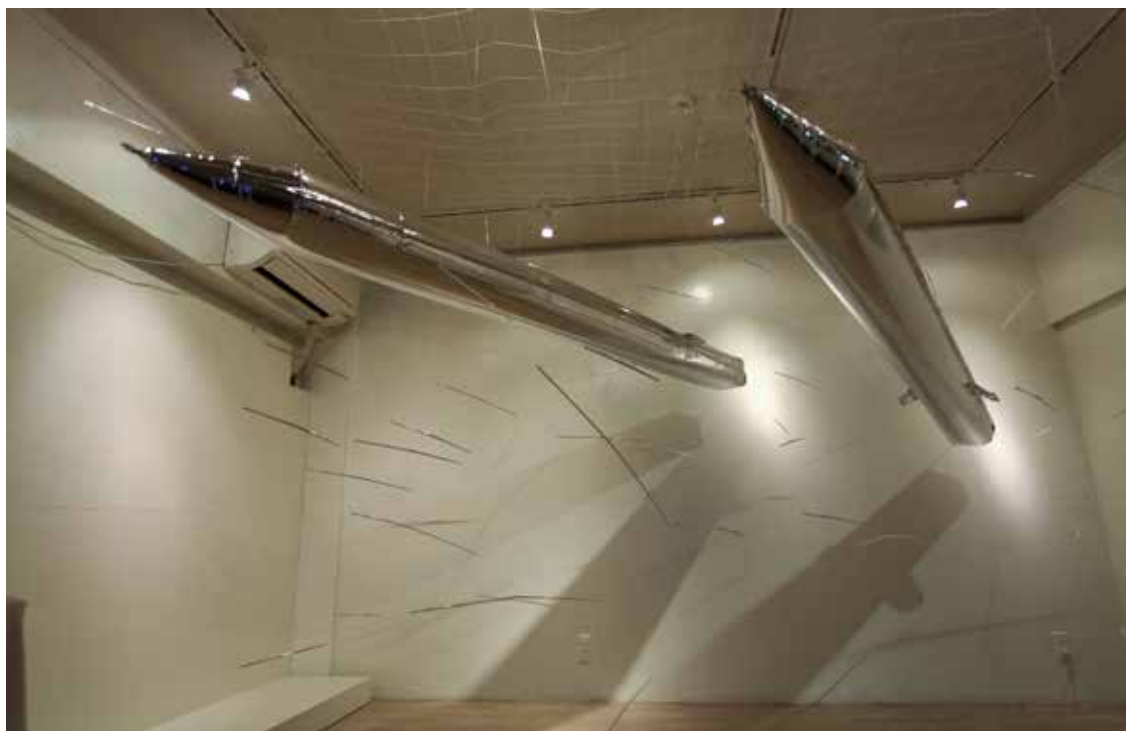
「北に向かう」は北朝鮮の軍事行動に際し、日本が迎撃ミサイルの配備を計画して軍国化していくことを懸念して作品化したものだ。作品は1/3スケールでアルミ蒸着フィルムによる金属的表面は緊張感がある一方で、空気が詰まっただけのバルーンはそのばかばかしさを示唆する。着磁された針金を内包するアルミの断片は、すべてが南北を指すが、そのlow TEC感は小学校で金属片に磁石を擦り付けて方位磁石を作った記憶からなり、近代技術の粋を集めて進められている配備計画とのギャップが作品におかしみを与える。

(会場掲示メッセージ)

≪昨年の北朝鮮の核実験と大陸間弾道弾の発射を受け、東北と中国地方に迎撃ミサイルの配備が検討されている。非核化の姿勢が示されても、引き続き警戒が必要なのは当然だが、その効果と代償については全く予想がつかない。それ以外にも護衛艦の空母化計画、

東シナ海での潜水艦による米軍・フィリピン軍との共同訓練の実施等、軍備の拡張が続く。

そのような状況を受けて、ミサイル迎撃システム「イージス・アショア」のミサイル「SM-3」を模した1/3スケールのバルーンを制作した。ミサイルの周辺には小型の砲弾が飛び交う様を、あるいはミサイルが空気を切って飛ぶ様子をアルミの断片により表現した。アルミの断片は磁性を帯びており、すべては北に向けて方位を取る。バルーンのミサイルの方向もそれに合わせて決定されている。それは今後の日本が同じ方向に向かい、それに抗うような言葉や行動は押し込められてしまうひとつの可能性を示唆している。平和憲法改正の動き、集団行動やメディア報道への規制など不安な要素は尽きない。かつての戦禍を迎えてしまった時代の空気に近いものを感じはしまいか。≫



「北に向かう」会場風景

「暑い人、寒い人」 (アートカゲヤマ画廊)

2019年には超大型の台風が3度も襲来し日本各地に甚大な損害を与えた。夏には記録的な暑さのため熱中症による多くの患者や死者を出した異常気象を受け作品化したものである。

(会場掲示メッセージ)

「今年の夏は猛暑でエアコンなしでは過ごせなかったという人が多かったのではないか。先進国のエネルギー消費が原因の一つともされる近年の世界的な異常気象は、各地に今まで経験したことのない極端な気温の変化をもたらしている。

この対策として冷暖房機器の普及率が伸びる一方、経済的な理由でそれを持ってない人々は、厳しい生活環境に追い込まれている。特に夏の都会では外気ばかりかビルの排気熱にもさらされるといった理不尽な状況が生じている。

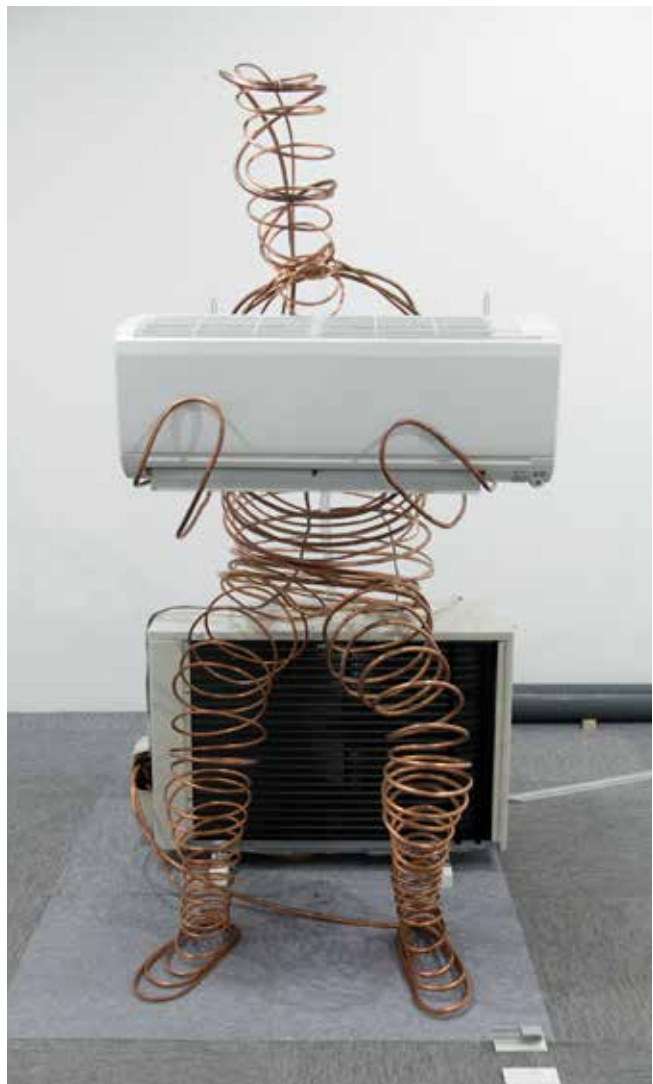
「暑い人、寒い人」はこの状態をエアコンを使って象徴的に表現したものである。冷媒管を用いて人体を形作り、この機器に依存して暮らす現代人を視覚化した。会場では2台のエアコンのうち、一方は冷房、もう一方は暖房に設定して同時に強制運転を行う。さらに室外機も同じ場所に置くことで、それぞれの排出口からも温度差の大きな空気が流れ出ることになり、一つの部屋の中に様々な温度の領域が生まれる。

壁面の各所には温度計を設置した。この個展開催時点である10月下旬の世界や日本の各地の気温を参照して、それに近い温度となる位置に取り付けている。

ギャラリー内のこの温度差を体験することで、急務とされる地球温暖化対策や格差社会の過酷な現状に思いをはせてもらうための装置である。≫



「暑い人、寒い人」展示風景



壁面の温度計12個のうち3個



暑い人、寒い人」会場風景

「続・川狩り」(川根温泉ホテル裏、鉄橋直下の河原)

「unmanned 無人駅の芸術祭／大井川 2019」

この展覧会は、大井川鉄道を舞台とした芸術祭ではあったが、その歴史を掘り起こしていくなかで、それ以前の材木運送手段として使われていた大井川の水運に着目した。歴史的な出来事を検証し再構築し体験する行為は、展覧会の原点となっている大井川鉄道についての存在や役割について深く回想すると同時に多角的な視点からその地域を考察することとなり、その作品がその地域で発表されることのアイデンティが確立された。

またこの作品は、山本直氏との共同制作であり、学生による制作サポートも受けた。その他県の土木事務所への河川利用申請、出港から係留までの12時間の筏流しのイベント等に多くの方が関わっている。そのすべてが作品の要素となり作品の厚みとなっている。(会場掲示メッセージ)

「大井川鉄道は昭和六年に千頭、金谷間が開通した。それまでは、大井川を利用したイカダと船、峠越えの馬、徒歩が主な交通手段であった。当時川根、金谷、島田地区の主たる産業である材木の運搬には大井川の流れが利用されていた。」

今回この鉄道と並行して流れるその川に焦点を当て、材木を川に流して運搬した当時「川狩り」と呼ば

れる輸送方法を再現する。移動と運搬、川と人、木と暮らし、景観、共同作業といった要素をアート表現の中で追体験することで、現代社会が利便性の代わりに失ったものを再発見する旅とする。》

(内容)

出発地を地名の鉄橋下の河原とする。到達、係留場所を川根温泉ホテル大井川鉄道鉄橋直下の川の中に設けられたコンクリートのブロック下の流れの穏やかなト口場とする。

流す木は製材において出る、バタ板と呼ばれる製品とならない表面を最初に切り取った部分。これを2枚並べ双胴船のように板でつなぎ合わせ。一方の板にマスト(竹)を付け布の旗を掲げる。旗には大井川鉄道19駅を記入+ (無人駅の芸術祭の旗2本)。計21隻を計画。

*作品の出航時においては、村人参加のイベントとする。

*係留地においては、コンクリートブロック堰の下流にポリエステルロープ10mmとスィベルにより川岸のテトラポットにつなぎとめ会期中設置する。会期終了後回収。



無人駅の芸術祭パンフレット



地域協働ゼミ_学生サポート風景



筏流し出発地_ロッジ「ともしび」前



筏係留場所_大井川鉄道川根鉄橋下の河原

作品：「続・川狩り」

作者：夏池篤+山本直

サポーター：大石歩真、兒玉絵美、杉山寧、垂見幸哉、村松遼太郎、兒玉徳治、

地域協働ゼミ参加学生：石川末菜、松下万純、渡邊明日香、飯塚歩咲、池田早希、亀山春菜、杉本紫乃

サポート企業：石音石材、落合製材